

ネル・ネムルの意義素

A Semantic Analysis of *Neru* and *Nemuru*.

荻野隆聡

1. はじめに

筆者は推理小説を読むのが好きである。この場合、内容が娯楽ものであるからねて読むことが多い。ねて読むといっても、もちろんねむりながら読むわけではない。

本はねて読めるが、ねむっては読めない。両者の違いは漠然とは分かるが、違いが分かるように厳密に示せといわれると簡単ではない。この違いをできるだけ明確に示そうというのが本稿の目的である。

2. 辞書の定義

1995年に『大辞林 第二版』(以下『大辞林²』)、『大辞泉』が相次いで出版されたが、ネル、ネムルに関しては『大辞林²』の定義の方がより詳しいので例として以下に示す。^(註1)

ネル

①「眠る①」に同じ。「ゆうべはよくねた」「毎日八時間はねる」

②寝床に入る。床につく。就寝する。

㊦睡眠や休養のために寝床に入る。

「もうねる時間ですよ」「ねる前に歯を磨く」

①病気で1日中寢床にいる。寝こむ。病床にある。

「風邪でねている」「まだねたり起きたりの状態です」

③異性と同衾する。共寝する。「女と初めてねた」

④横たわる。

⑦人が横たわる。「ねて本を読む」

①本来立っている物が横になる。「台風で稲がねてしまった」「活字が
ねている」

⑤資金や商品が活用されない状態にある。「ねている資金を投資にまわ
す」「ねていた商品を安く売る」

⑥味噌・醤油・酒などがよく仕込まれた状態である。

ネムル

①心身の活動が一時的に休止し、目をとじて無意識の状態になる。ねる。

「ぐっすり一・る」「子供たちはもう一・った」

②死ぬ。また、死んで埋葬されている。「父母の一・るふるさと」

③（能力・価値などが）活用されない状態である。

「海底に一・る資源」

④活動をやめて静かである。「草木も一・る丑三つ時」

「閉山後は町全体が一・っている」

⑤蚕が脱皮前に一時活動をやめ、桑の葉を食べない状態になる。

⑥目をつむる。目を閉じる。「文三は眼を一・って黙つてゐる／浮雲 四
迷」

『大辞林²』ネルの定義①ではネムル①と同じとなっているが、本稿の目的は先に述べたように、両語の相違点、共通点を出来るかぎり厳密に示すことであるから、この記述はその手掛かりも与えてくれそうにない。そこで、小泉他編(1989)^(註2)を見ると次のようになっている。なお、紙幅の都合上意味記述に關係する箇所のみを引用する。

ネル

- (1) 体を横にする。
- (2) 長い草が倒れた状態になる。
- (3) 目を閉じ，意識のない状態になる。
- (4) 病気などで床につく。
- (5) ものが利用されていない状態にある。
- (6) 性行為をする。

ネムル

- (1) 目を閉じ，意識のない状態になる。
- (2) 死ぬ。
- (3) 物が使われない状態で存在する。

定義のみであるが，これでは『大辞林²』の記述と大差はない。ここでもネル(3)とネムル(1)の意味範囲は全く同じということをいっている。たとえ全く同じであっても，なぜそうなるのかを説明せねば我々の目的は達せられない。比喩的用法では一方のみが使用可能な場合が多々ある。しかしネル・ネムルは，以下に示すように同じような場面を描写できる場合もあれば，そうでない場合もある。更にこの2語の反義語はそれぞれ異なり，このことも基本義が異なるという手掛かりを与えてくれる。ネルの反義はオキルであり，ネムルの反義は(目が)サメルである。詳細については森田(1996)。他方を使っただけでは何をいっているのか分からなくなってしまう。これは両者の基本義，すなわち意義素が異なるためであると考えられるので各々についてできるだけ厳密に分析を施さなければならない。

3. 分析

まず『大辞林²』の定義を基に最小対立において比較対照してみる。用例は特に断りが無い限り，『大辞林²』から借用したものと作例とで対照する。

1a 朝までぐっすりとネル

1b 朝までぐっすりとネムル

1c 波子は今朝、よく眠って起きて頭がきれいにさっぱりしていた。(川端康成『舞姫』新潮文庫, 61)

1aは朝に起きて夜に睡眠を取るという人間の一般的行動様式に焦点を当てている。睡眠は典型的には布団などに横たわって行う。1bは1aのような一般的行動様式ではなく、実際の睡眠に焦点が当たっているように感じられる。1cは一見すると、ネムルの反義がオキルのように見えるが、そうではない。ここではオキルは「目を覚ます」ことを意味している。横になった状態（睡眠状態）から体勢をオコセば目が覚めるのは当然である。このような使われ方では他にも「彼は寝起きが良い（悪い）」、「彼は最近、寝たり起きたりだ」などがある。1a－cは人間に使われた場合の最も一般的な用法であろう。ただし1aのネルには明確な「現象素」が存在すると思われる。現象素とは国広(1994)によって提出された比較的新しい概念である。

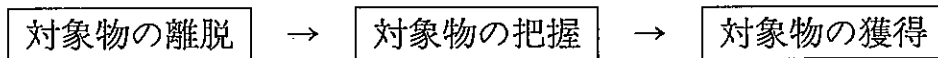
語が具体的な場面で用いられるときは、場面・文脈によってさまざまに異なる意味を表面的に示すが、その異なり方のかなりの部分は場面条件、文脈的要素と連動しており、その限りにおいてその語自体の意味から取り除いて考えることができる。こうして得られた語自体の意味を我々は「意義素」と呼ぶ。

[中略]

上記のような意義素を認めざるを得ないことは、国広哲弥(1970), (1989 b) に詳しく述べている。しかしこの考え方は「あるひとつの語形には一つの意義素しかない」という単義説を主張しているのではない。そういう単義のことももちろんあるが、すでに述べてきたようにある同一の現象に基づく認知的多義が認められるならば、意義素はふたつ以上になり得る。この同一の現象のことを「現象素」(phenomeneme) と呼ぶことにしよう。これは単なる外界の一部というものではなく、人間の認知作

用を通して、ひとまとまりをなすものとして把握された現象を指す。(国
広1994, 下線は筆者)

上の引用文の下線部分に注意していただきたい。語彙項目の中には、語の意味を文字で表すことができる語が多くあるが、一方で文字で表記するのが困難な場合もある。後者の場合には、この現象素という考え方が非常に有効になる。国広は上掲の論文でトルを例に挙げている。「庭の草をトル」、「戸棚から小皿をトル」、「運動会で1等賞をトル」の3つのトルはそれぞれ(庭からの)〈離脱〉、(小皿の)〈把握〉、(1等賞の)〈獲得〉を表してはいるが、その動作はひとまとまりをなす現象である。この考え方に基づけばトルの現象素は以下のようなになる。



この一連の現象がトルの現象素である。

1aのネルの現象素を、を加えて示すと(図1)のようになるだろう。

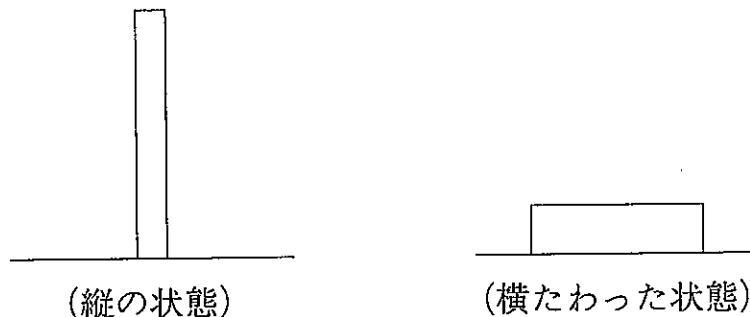


図1

この現象素により『大辞林²』の定義⑤、⑥に見られる睡眠と関係ないような意味も説明可能となる。

1bはどうだろうか。ネムルは前述のように、筆者の内省では睡眠自体を直接的に指していると思われる。このことは以下の比喩的用法の考察を行うことによってさらに明らかになってくるだろう。

2a 風邪でネテいる

2b ? 風邪でネムッている

3a ネテ本を読む

3b *ネムッて本を読む

2a が意味するのは、「風邪をひいて体の調子が普通の状態にないので正常な状態に戻すために、横になって休養をとる」ということであり、人間が睡眠を取る場合の典型的な体勢に焦点を当てていると考えられる。ここでいう普通の状態とは人間が日常生活を営むことができる状態すなわち直立姿勢（縦の体勢）をとれる状態を指す。実際に睡眠を取っているかもしれないし、横になっているだけかもしれない。つまり睡眠に関しては無標である。同様に「風邪はネテ治す」の場合も睡眠に関しては何も言及していない。これに対して2bは、活動状態にないことに焦点が当たっている。人間の場合典型的には睡眠を取っている状態のことである。2bが成立するためには主体は実際に睡眠をとっていないなければならない。我々の日常生活では風邪をひいた場合、2aのほうを使うことが多いのではないだろうか。3aの「本を読む」は睡眠を取りながら行うことが不可能であり、2aと同様「横たわっている体勢」に焦点を当てている。2a、3aに共通していえるのはネルには睡眠は含まれないということである。また、1a、2a、3aに共通しているのは「横になった体勢」である。ここにおいてネルの中心にあるのは（図1）の現象素であることがより一層明らかになる。3bは活動状態にないことを意味し、人間の場合であれば睡眠状態にあることを意味してしまうため矛盾になる。1bから3bまでいえるのは「主体が活動状態にない」ことである。

4a *父母のネルふるさと

4b 父母のネムルふるさと

これらは1-3までとは異なり、ネムルのみがいえる場合である。この場合は一見して分かるように睡眠の有無とは関係がない。3までで見たように、ネ

ルの基本義は「縦のものが横になる」ことと考えられるので、直接死と結び付かない。一方、ネムルは3までの分析で「活動状態にない」が基本義であると考えられるので、睡眠状態の延長過程と解される死んだ状態を表すことができる。人間の活動停止の継続状態は「死ぬ」ことなので、ネムルは「死ぬ」の婉曲表現となる。また、「彼女とネル」が「性行為をする」を表すことがあるが、これはネルの語用論的推義表現^(註3)と考えられる。指し示したい行為と時間的に近接する行為を表現することでその行為を指すのである。語用論的推義表現は身近な例で挙げれば、「(お)手洗い」がある。これは時間的に後の行為を表現して実際の排泄行為を指すのである。(図2)では、表現したいのは指し示したい行為だが、社会通念上または慣習的に直接言うことは憚られるので、近接した動作をいうことによって間接的に表現している。カッコ内は実際に指し示したい行為の前の行為か後の行為かを示している。

指し示したい行為	実際に表現する行為
性行為	ネル (前)
排泄行為	手洗い (後)

図2

次の4例において、実際にネル・ネムルものは5a, 5bでは「資源」、6a, 6bでは「資金」であり、主体の種類としては似たようなものであるが、5aのみはいえない。

- 5a * 海底にネル資源
- 5b 海底にネムル資源
- 6a ネットしている資金を投資に回す
- 6b ネムッている資金を投資に回す

また次のような例もある。

7a *地下にネル財宝

7b 地下にネムル財宝

8a ネテいた商品を安く売る

8b ネムッテいた商品を安く売る

5-8の説明には非対格動詞, 非能格動詞という概念が有効である。非対格動詞, 非能格動詞の概念は前から存在したが, 影山(1996)が詳述した。略述すれば, 非対格動詞はナル型自動詞(主語の意志ではなく, 自然に事態が発生することを表す自動詞), 非能格動詞はスル型自動詞(意図的行為を表す自動詞)と言い換えることができる^(註4)。これは動詞に関して言われた概念であるが, 名詞についてもこれと平行した関係が認められると思われる。つまり, 「資金」「商品」は意図的かつ作為的なもので消費されるのが目的であるが, 「資源」「財宝」はそうではなく無意図的かつ非作為的であり, 必ずしも消費されるとは限らない。このため, 「資金をつくる」「商品をつくる」とはいえるが, 「*資源をつくる」「*財宝をつくる」とはいえない。言い換えると, 「資金」「商品」のあるべき姿は人間によって消費されることであり, 他方「資源」「財宝」のあるべき姿というものは存在しない。人間によって発見されてもされなくても, 人間にとって「資源」は「資源」であり, 「財宝」は「財宝」である。このことは「資源」「財宝」が前述した無意図的, 非作為的であることを示している。かくして, 「資金」「商品」は非能格的な名詞, 「資源」「財宝」は非対格的な名詞と考えることができる^(註5)。

味噌, 醤油, 酒などにネルを使うのは特殊な場合と思われる。睡眠は生理学的にいえば疲労を回復させるため, 体調を良好な状態に戻すための行為である。この働きを味噌, 醤油, 酒などの熟成過程に比喩的に用いたものと考えられる。つまりよく睡眠をとった後の味噌, 醤油, 酒などは状態が良く, 味も良いのである。ここでネムルが使えないのはその基本義が「無活動の状態になる」ことなので, 熟成が止まってしまっただけでは困るのである。

現代では, 文学的効果をねらった作品以外で, ネムルを「目をつむる, 目を閉じる」の意味で使うことはほとんどないのではないだろうか。『大辞林²⁾

の用例も明治時代のものである。参考までに実例を1つ挙げておく。やはり大正初期のものである。

- 9 自分も眼を眼った。襖一つへだてた隣座敷には兄夫婦が寝てゐた。(夏目漱石 『行人』)

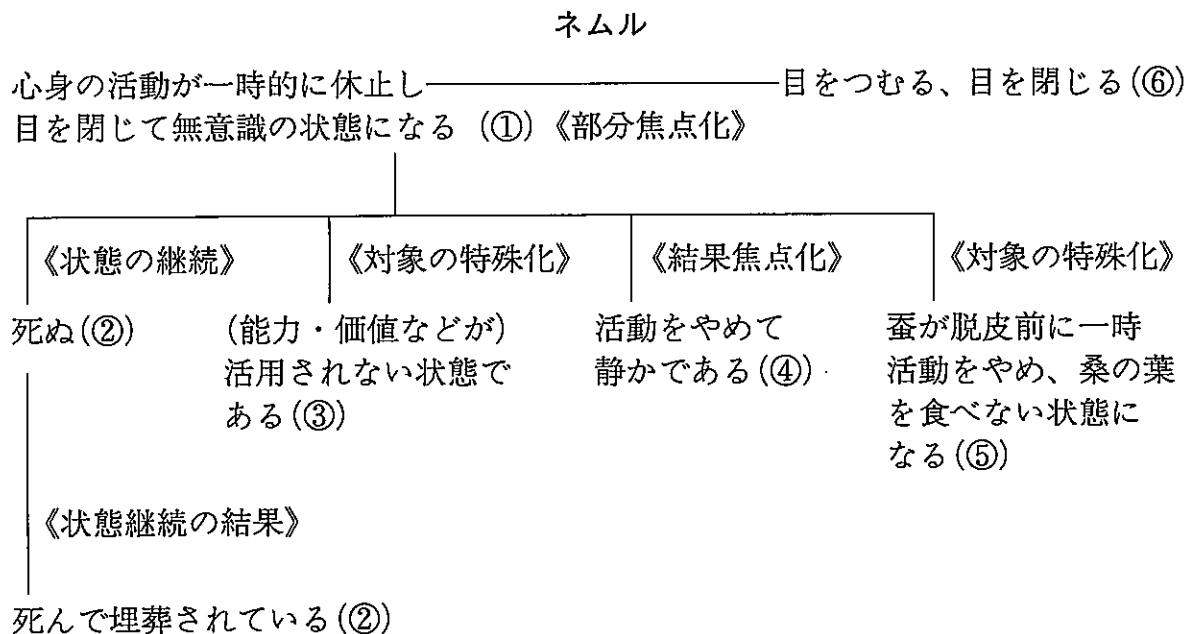
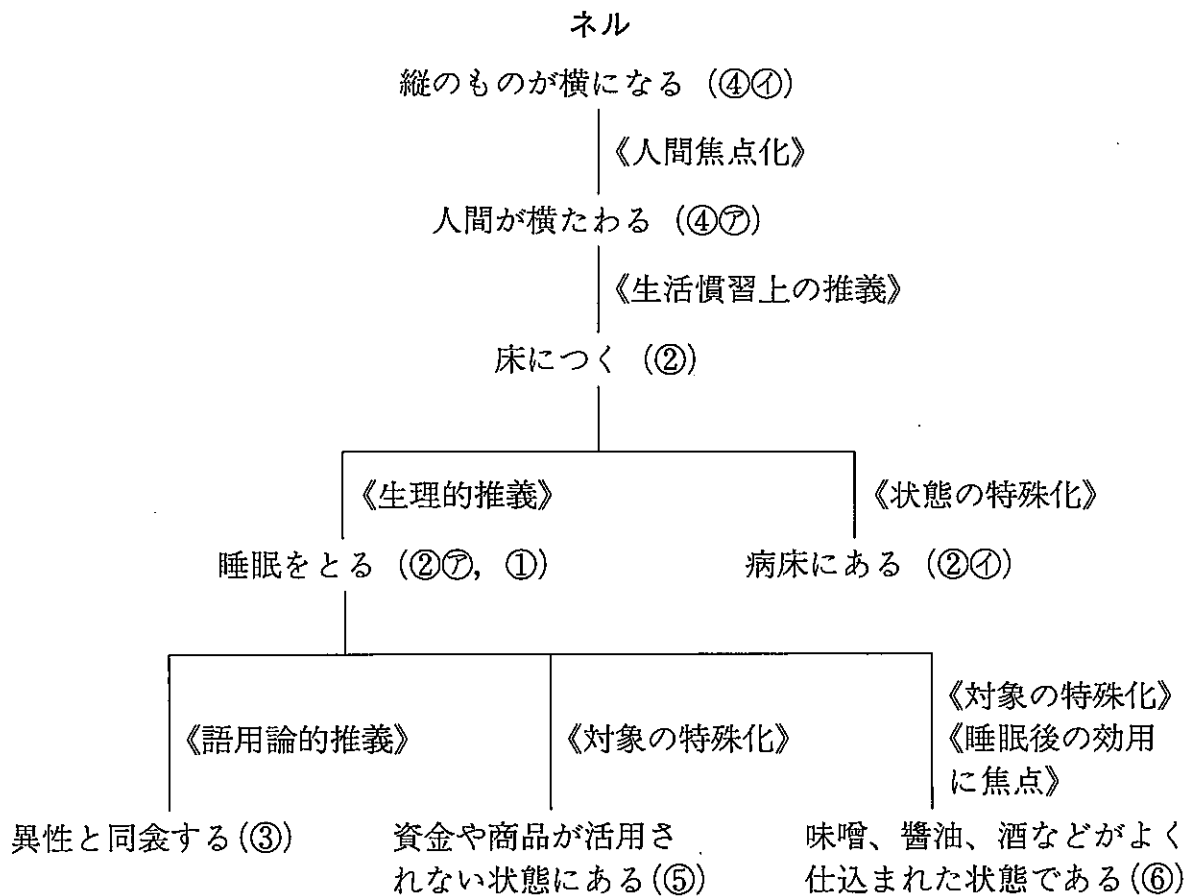
3. ネル・ネムルの意義素

以上の考察からネル・ネムル両語の意義素記述を試みると次のようになる。

ネルの意義素 縦になっていたものが横になる。この動き自体が現象素である。この裏には縦が正常、横は異常という推論が働いていると考えられる。基準は人間であり、無生物に使われる場合は派生と考えられる。したがって人間中心的に考えれば、起きて活動している時(縦の状態)が正常であり、睡眠を取っている時(横の状態)は異常ということになる。

ネムルの意義素 睡眠状態に陥る。無生物に対して使われると無活動の状態になることを指す。

また、ネムルは直接に睡眠を取ることを意味するが、ネルは間接的にしか睡眠を意味しないと言える。これはネムルは積極的な睡眠状態への移行を意味するのに対して、ネルは「縦のものが横になる」、「人間が横になるのは典型的には睡眠を取るときである」という類推を経た後で睡眠の意味が現れてくるためだと考えられる。



4. ネル・ネムルの意味派生

本稿で述べてきたネル・ネムルの意味派生を、『大辞林²⁾』の定義を参考に並べ換えると左頁のようになるだろう。()内は『大辞林²⁾』の定義の番号である。

5. おわりに

現行の国語辞典の多くは語義の説明に満足してしまっていて、各々の意味関係を正確に記述しているものは少ないのではあるまいか。特に基本語の意味派生を詳説しているのは少ない。本稿では日本語の動詞ネル、ネムルについて意味分析を行った。両語の意味派生、多義の構造が多少なりとも明らかになったのではないかと思う。このような意味関係を的確に捉えることにより多義語の意味構造、更には意義素もおのずと見えるようになってくると思われる。

(注1) 他に以下の辞書を参照したが、定義がこれら2冊と同様あるいは簡単すぎる感がある。

『岩波国語辞典 第五版』, 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編, 岩波書店, 1994年。

『学研国語大辞典』, 金田一春彦・池田弥三郎編, 学習研究社, 1988年。

『三省堂国語辞典 第四版』, 見坊豪紀主幹, 金田一京助・金田一春彦・柴田武・飛田良文編, 三省堂, 1992年。

『新明解国語辞典 第四版』, 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄編, 三省堂, 1989年。

『日本語大辞典』, 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤議・日野原重明監修, 講談社, 1989年。

(注2) 田中(1996)も注記しているように、従来の国語辞典の悪しき伝統を受け継ぐような意味記述であるが、参考までに挙げておいた。国広(1995)もこの辞典には問題が含まれていると指摘する。なお、森田(1996)もネル・ネムルについては項目として取り上げていない。オコスの項目で多少触れ

てはいる。

- (注3) 国広 (1990) は次のようにいう。「metonymy は一般に「換喩」と訳されているが、これは換喩を比喩の一種のように思わせる危険があるし、「換」も意味を的確に伝えにくいように思われるので、試みに「推義」と訳してみた。metonymy とは時間的・空間的に隣接する事物に意味が推移する現象をいう。」筆者も同様のことを感じており、本稿でもこの用語を採用した。
- (注4) ナル型動詞，スル型動詞については池上 (1981) を参照。
- (注5) 非能格的な名詞，非対格的な名詞については更なる考察が必要であり，ここでは試論的概念として提出した。

【参考文献】

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』，大修館書店。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』，くろしお出版。
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』，三省堂書店。
- 国広哲弥 (1989=1989b) 「意味と用法」，『講座日本語と日本語教育第6巻日本語の語彙・意味(上)』，明治書院。
- 国広哲弥 (1990) 「言語学のキーワード〈意味6〉」，『言語』4月号，大修館書店。
- 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論——現象素の提唱——」，『言語研究』第106号，日本言語学会。
- 国広哲弥 (1995) 「日本語多義動詞の意味と文型記述」，『人文研究』第126号，神奈川大学。
- 小泉保，船木道雄，本田晶治，仁田義雄，塚本秀樹編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』，大修館書店。
- 田中聡子 (1996) 「動詞『みる』の多義構造」，『言語研究』第110号，日本言語学会。
- 松村明編 (1995a) 『大辞泉』，小学館。
- 松村明編 (1995b) 『大辞林 第二版』，三省堂。
- 森田良行 (1996) 『基礎日本語辞典』第七版，角川書店。